

恍惚と覚醒

全国霊感商法対策弁護士連絡会の全国集会が、この秋も東京で開かれた。被害者とその家族、弁護士、宗教者ら約二百人が参加し、新しい手口を次々と編み出してくる「彼ら」の最新情報を交換しあった。

ご依頼があつて、今回は私が「信じる危うさについて」という題で十分ほどの講演をした。良い宗教と悪い宗教の見分け方は難しいが、とりあえずは一切を信じないことが大切だ、そもそも外にある何かを対象的に信じるのが宗教の本来ではない、そうではなくて神仏に気づくこと、感動することが大切……といった

南	無
善	財

菅原伸郎

た趣旨だった。

《仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺せ》という臨済の言葉も紹介し、理性を捨てて信仰する危険を述べたつもりだった。しかし、会場にはキリスト教の方々も多く、たとえば「悟り」については理解していただけなかったらう。あとの質疑応答では、ある弁護士からこんな意見が出された。

「一種の神秘体験が大事というけれど、それを重んじるカルト集団もある。神秘的な境地を目指して修行さ

せ、非人間的なことまで強制させている。宗教体験の強調は、むしろ危険ではないか」

核心を突いた問いであり、当然の疑問だった。「彼ら」の目指す体験と禅門などのそれとは、同じものなのか、違うのか。時間が限られていたせいもあつて、その場の私は「恍惚となることではなく、ありのまま、事物を冷静に受け入れること。それが本来の宗教的覚醒です」と答えただけで終ってしまった。あまりに素っ気なく、かえって分からなくなつたかもしれない。

「不立文字」という言葉があるように、覚醒の内容や過程を説明することは至難の業である。報告された「彼ら」の神秘がどんなものか、集

団や指導者によって内容は異なるだろうから、一概に論じることはできない。伝統宗教とよく似た修行もあるだろうし、伝統宗教の中に怪しい要素が混じっている場合もある。だから、宗教体験の有無だけで相手を見分けることはもちろん不可能だ。組織が民主的に運営されているか、人権侵害がないか、といった常識的な基準も必要になるだろう。

ただ、禅仏教や中世キリスト教の神秘思想家エックハルトらが説く世界は、エクスタシーや恍惚とはまったく違うことだけは確認しておきたい。前者の涅槃寂靜が知的で靜的な感動なのに対し、後者は一種の快樂に身を任せるエロースの世界だ。自分の外にある神靈や超越的存在から

何かが乗り移ったとか、それらと「合一」したとか、さまざまな報告があるが、いずれも理性を放棄した熱狂である。伝統宗教にせよ、カルトにせよ、こうした信仰は不潔であり、危険と見るべきだ。

五年ほど前に訪れたブータンのチベット仏教寺院で「歡喜仏」を見たことがある。男女の交合そのものを描いた極彩色の彫りもので、これと同じ仏教なのか、と驚いた。たしかにセックスの絶頂に達したときは無

我や三昧らしき境地になるが、それは釈尊の教えからほど遠い。こうした逸脱は、中世日本の「立川流」や、マゾヒズムと紙一重の荒行などにも見られることである。

本来の覚醒とはどこが違うのだろう。宗教学者・岸本英夫の『宗教神秘主義』（原書房）には数々の体験報告が載っており、特質として「高揚感」や「非合理性」とともに「知的性格」が挙がっていた。理性を捨てるのではなく、絶望を靜かに受け入れるということだ。もちろん、その道は自己流によってではなく、古今の先輩や思想によって裏打ちされていくべきだろう……。

（すがわら・のおお／

東京医療保健大学教授）

